

「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくり

～教員一人一人の主体性の向上と授業改善を目指した校内研究支援～

主査・指導主事	小林 美佳
主査・指導主事	天野秀太郎
主査・指導主事	宮下 昌久
副主査・指導主事	坂本 久美
副主査・指導主事	西谷地力也
副主査・指導主事	三枝 朋佳

キーワード 全国学力・学習状況調査分析結果の活用, 授業改善

研究の概要

研究推進校(山梨県総合教育センターが校内研究を支援・サポートする学校 以下推進校)における授業改善の支援の在り方に関する研究を行い、「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくりに寄与する。研究期間は2年間を基本とし、今年度はその1年目である。

中学校チームの研究主題と副主題は、次の通りである。

「主体的・対話的で深い学び」の視点で目的を明確にした授業づくり
～教員一人一人の主体性の向上と授業改善を目指した校内研究支援～

推進校の研究主題及び副主題は、次の通りである。

甲斐市立双葉中学校

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善
～教師の意識改革から学校改革へ～



図1 双葉中学校

I 主題設定の理由

各学校では、校内研究を行っているが、教員一人一人が各校の研究主題の実現に向けて主体的に関わる意識に課題があり、授業改善につながっていないケースが見られる。その課題解決のためには、学力調査の結果分析からわかる課題の把握や授業改善の視点、校内研究の振り返り等、これまで個人に任されることが多かった内容を具体的に共有したり、職員全体で進めたりすることが有効ではないかと考えた。職員全体で進めることで、職員が一丸となって研究主題の実現を目指そうとする意識が高まり、それが教員一人一人の主体性にもつながると考えたためである。さらに、学力調査の結果分析に関しては「全国学力・学習状況調査(以下全国学調)及び山梨県学力把握調査データ分析作業部会(以下データ分析WG[ワーキンググループ])」と連携を図ることで、その効果は一層高まることが期待できる。研究主題に関わる意識を高めるための支援は、教員一人一人の主体性を向上させ、延いては「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善にもつながると考える。

本年度は、推進校の研究主題を受け、校内研究会で実施した学習会やワークショップを通して、個々の教員が日常の授業実践において主体的に授業改善に取り組んでいくことを目的とした。

II 研究の目的

教員一人一人の主体性の向上と授業改善につながる校内研究が、推進校を含めた多くの学校において実践できるよう、学校の特徴を生かした実践に寄与するとともに、事例の蓄積を通して、本センターのシンクタンク機能の充実を図る。

Ⅲ 研究の方法

本研究の方法は以下のとおりである。

- ・学習会，指導案検討，研究授業，研究会の講師派遣等の支援を通して，教員一人一人の主体性の向上と授業改善を推進していく。
- ・山梨大学と連携した，全国学力・学習状況調査（以下全国学調）の分析結果に基づいた授業研究を通して，生徒の実態に沿った授業づくりを推進していく。
- ・先生方が自分自身の変容を自覚できるように，Google classroom を利用し，教員同士が相互に確認し合える校内研振り返りシートを活用する。また，その記述とアンケートの結果を検証の手立てとする。

Ⅳ 研究の経緯および結果と考察

1 研究の経緯

本年度の推進校への支援は以下のとおりである。センター指導主事と後述するデータ分析 WG のメンバー（山梨大学教授、准教授）が連携し，継続的な支援を行った。本センター指導主事による推進校への訪問人数は，延べ 29 人であった。

(1) 双葉中学校への主な支援

4月15日(金)

- ・研究についての事前打合せ

5月6日(金)

- ・自校採点講習会

6月1日(水)

- ・教科学習会

7月11日(月)

- ・山梨大学清水教授による学習会

8月23日(火)

- ・拡大校内研究会の打合せ
- ・山梨大学齊藤教授による学習会

10月25日(火)

- ・拡大校内研究会(道徳・数学・国語)

11月24日(木)

- ・研究授業(英語)

(2) 山梨大学との連携による支援

本県では、「山梨県教育委員会と山梨大学教育学部との連携協議会」を立ち上げている。この連携協議会内には，本県学力向上に際し学術的な知見を得ることを目的として「データ分析 WG」を設置している。今年度は，双葉中学校の取組に関わって，以下のとおりデータ分析 WG を開催した。

5月30日(月)

- ・今年度の WG 作業部会

5月～6月

- ・双葉中学校の全国学調の早期分析

7月11日(月)

- ・山梨大学清水教授による学習会

8月23日(火)

- ・山梨大学齊藤教授による学習会

9月2日(金)

- ・全国学調分析作業(数学・国語)

10月25日(火)

- ・拡大校内研究会における指導助言

10月26日(水)

- ・データ分析 WG による全国学調分析結果報告
- ・拡大校内研究会の報告

3月3日(金)

- ・本年度の取り組みと令和5年度の方向性

全国学調の早期分析を生かした研究授業や学習会にも直接学校現場に出向いていただき，大学の先生方から指導・助言をいただくことができた。

2 支援の具体

(1) 調査結果の分析に基づく授業づくり

本センター指導主事及びデータ分析 WG が連携し，全国学調(国語，数学)の結果分析に基づく提言を行い，授業者と協同で研究授業の単元を設定した。調査結果から明らかになった生徒の実態に沿った授業づくりを授業者と相談しながら推進し，その際も，推進校の主体性を大切にした。

今年度の双葉中学校の校内研究会で行った主な支援は，以下の4つである。



図2 部会の様子

- ア 自校採点講習会の実施
- イ 教科学習会の実施
- ウ 全国学調の分析を踏まえた学習会の実施
(数学・国語)
- エ 拡大校内研究会に関わる支援

ア 自校採点講習会

5月上旬に実施した自校採点講習会では、今年度行った全国学調の国語と数学をグループに分かれて採点した。採点は、解説資料を見ながら、生徒の解答を類型に分けることで、生徒がどのような間違いをしているのかを採点者が把握できるようにした。直接的な結果として現れるのは教科における生徒の課題ではあるが、職員全体で共有し検討することで、他教科や普段の学校生活の中で課題を解決するためにはどうしたらよいか、課題解決の糸口を広げることができた。

はじめに、指導主事から「調査とは」「何を分析するのか」「どのように類型わけするのか」について説明を行った。

採点については、学年ごとに国語と数学に分かれて同時進行で行った。採点を始めるとグループでの会話も活性化し、相談し合ったりアドバイスし合ったりしながら進めていた。

採点后、各グループでマンダラシートを作成しながら、自校の生徒の課題とその対応策について協議を行った。どのグループも活発に討議していた。

研究会後の校内研振り返りシートより

- ・実際に子供の解答を前にして分析をすると教師の意欲が高まる。
- ・深い学びの実現にむけて、全国学調の分析は改めて有効であった。
- ・答えを求める教科ではない美術を担当しているが、数学の解答分析で基礎知識、スキルの定着の為に復習や計画的学習が必要であることを確認した。

分析を行うことで、「なぜ間違えたのか」「どのような間違いをしているのか」を知り、そこから「どのような力が不足しているのか」「どのような取り組みが必要なのか」を考えていくことができる。また、それを他教科の教員とも共有できるという点でも、自校採点の意義が感じられる校内研となった。

今後は、分析して得た結果をもとに考えた取り組みを、実際にどのように進めていくかについて、検討していく必要がある。

イ 教科学習会

今年度の研究副主題として掲げている「教師の意識改革から学校改革へ」の実現を目指し、教科の学習会を行いたいという推進校の要望に応えるために、センターから国語・数学・社会・英語・音楽の5名の指導主事が参加し、教科ごとの学習会を行った。当日、指導主事が参加できなかった教科に関しては、教科部会で挙げた内容に対し、後日、教科担当指導主事が回答するという形をとった。「各教科における主体的・対話的で深い学びについて」「見取り方や見取る場面の具体」「評価に関わる内容」「各教科でのICTの活用場面、実践事例等」について、現場の先生方と指導主事が共に考える機会となった。

研究会後の校内研振り返りシートより

- ・生徒の主体性をどう作り出すか。挙手やグループ活動などをどう工夫すれば最適な学びにつながるかを数学科の教員で情報交換できて有意義であった。
- ・ICTの有効な活用については、「個別最適化」の視点と「協働」の視点を持って考えてみたいと思う。
- ・授業を組み立てていく上で生まれたモヤモヤ感を解消することができた。

多くの先生方にとって、今後の授業につながる学習会となった。若年層の先生方にとっては、他の先生方の考えや授業の視点等を学ぶ機会にもなったと感じる。この教科学習会で学んだことにより今後の実践意欲が高まっている様子も感想から窺える。



図3 講習会の様子



図4 協議の様子



図5 学習会の様子

ウ 全国学調の分析を踏まえた学習会

4月に実施した全国学調の双葉中学校の分析を山梨大学の清水教授と齋藤教授に依頼し、その分析結果から見られることについての学習会を行った。

7月に実施した学習会では、清水教授を講師として招聘し、「数学的表現を用いて理由を説明すること」「日常の事象と数学の世界を行き来しながら解釈すること」など、分析結果から見られた課題と改善策について指導助言をいただいた。

8月には、山梨大学齋藤教授の講義をオンラインで行った。国語における双葉中学校の課題を明らかにし、生徒たちの学習における「視点」を「表現」だけでなく「構成」や「展開」にまで向けさせることで、より深い学びへとつなげられることなど、授業における着眼点等について具体的に指導助言をいただいた。研究授業の方向性についてもご示唆をいただいた。

研究会後の校内研振り返りシートより

- ・問題から課題に進み、その際に目標を提示するという流れが自分の中で落ちました。生徒が授業を通してメタ認知の力を高められるような授業を考えていきたい。
- ・わかってはいてもこちらの都合で授業を進めてしまう場面もあったので、常に生徒と関わりながら自身の授業も改善していきたい。
- ・指導と評価の一体化の話聞き、評価の見取り方について、考えを整理することができてよかった。

全国学調の分析の視点を知ることができ、分析から見えてきた課題をどのように授業に生かしていくかについて、具体的な指導方法を学ぶことができた。また、目標と振り返りを授業での見取り方や主体的・対話的で深い学びの見取り方についての話も聞くことができ、先生方の授業改善に直接つながる校内研となった。



図6 学習会の様子

エ 拡大校内研究会

全国学調の結果を踏まえ、授業者と本センター指導主事が連絡を取り合い、協同で指導案を作成した。道徳（1年）、数学（2年）、国語（3年）の3教科の授業を実施した。国語、数学については、全国学調の分析を依頼した山梨大学の清水教授（数学）と齋藤教授（国語）にもご指導いただいた。お二人の先生には、拡大校内研の研究会においても指導・助言をいただいた。

近隣の小・中学校や高等学校の教員及び今年度新たに研究主任となった教員など、64名がそれぞれの分科会に分かれて参観した。

<1年：道徳>

教材名 「1冊のノート」

（「私たちの道徳 中学校」文部科学省）

家族の存在や思いに気づき、温かい家族を築いていこうとする心情を育てるために「家族愛」を主題として「家族をつなげているものは何だろう」という大きな問いについて考える授業を行った。ロイロノートを活用して個人やグループで意見をまとめる活動が行われた。



図7 研究授業の様子

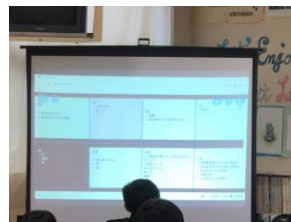


図8 研究授業の様子

<2年：数学>

単元名 「一次関数」

具体的な事象における2つの数量の関係を一次関数とみなして、数学的に処理することを通して問題を解決する授業を行った。数学的な表現を用いて説明することが苦手という課題を解決するため、自分の考えを持たせたり、他者の考えを聞いて交流させたりした。また、自分の分かったことや分からなかったことなどの、振り返りが行われた。



図9 研究授業の様子

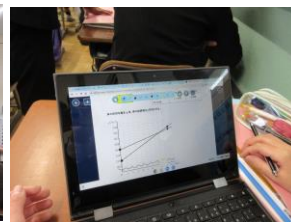


図10 研究授業の様子

< 3年：国語 >

単元名 「故郷」

魯迅の「故郷」を読んで、情景描写や比喩表現、登場人物の言動から、ヤンおぼさんの人物像について考える授業を行った。「場面と場面、場面と描写などを結びつけて、内容を解釈する」資質・能力に課題があるため、「故郷」という作品の登場人物の心情や作者の意図を伝える叙述が随所に見られる構造から場面と場面、場面と描写などを結びつけて、内容を解釈する授業が行われた。

事後研究会は、教科ごとに研究会を行った。研究会では、進行係が協議の進め方を説明した後、5月の自校採点講習会の際に実施した、マンダラシートを用いて、小グループに分かれて協議を行った。新研究主任をはじめ、外部からの参加者もあったため、マンダラシートを用いることで討議が活発に進んだ。



図 11 研究授業の様子



図 12 研究会の様子

以下は、振り返りシートと参加者のアンケートの記述である。

振り返りシートの記述より

参加教科：道徳

- ・中心発問が意味する投げかけが生徒にうまく伝わったかが課題となりそう。家族を題材にしたものは身近に感じることができる反面、自分の家族に返らせることの難しさも感じた。
- ・目的を明確にした授業づくりでは実物教材や ICT 機器を活用することが有効であると感じた。

参加教科：数学

- ・授業の流れもよく、生徒もいきいきと活動していた。ICT の利用が大きなテーマであったが、グラフの場面や学び合いの場面で ICT が有効だった。

参加教科：国語

- ・授業の中で ICT をどう使うかを考えさせられた。小グループでの話し合いの後、どのグループからも「タブレットに向かうだけでなく、生の声での話し合いも必要」という意見が出たことが印象的だった。

アンケートの記述（参加者）

参加教科：道徳

- ・子供たちが家族愛について真剣に考えたり、表現したりする姿が大変印象的でした。主体的に学び、友達同士で語り合い、深く考える姿が見られました。

参加教科：数学

- ・実生活と関連のある課題となっていたので、生徒が意欲的に課題解決に向かっていた。表、グラフ、式と自分の考えにあった解決方法を選択できるようなワークシートが用意されていたりロイロノートの共有ノートを利用し、グループの意見を全体で共有したりと ICT の活用場面や活用方法を知ることができた。

参加教科：国語

- ・ICT を活用した発表方法が参考になりました。発表した後に考えを深めるための ICT の活用方法をさらに追求すると良いと思いました。

(2) 校内研振り返りシートについて

校内研究会における、教員の毎回の学びを蓄積するために、校内研振り返りシート（全職員で振り返り考えるシート）を用意した。シートは、校内研用 Google classroom を作成し、全職員で共有できるようにした。内容は、各校内研究会の終わりに、

研究主題の実現に向けて、各回の校内研を通してわかったことや気付いたこと、考えたこと

を自由にスプレッドシートに記入するというものである。

振り返りシートは、共有状態で編集しているので、リアルタイムで教員同士がお互いのスプレッドシートの編集内容を確認できるようになっている。シートには、年度当初と年度末で、「研究主題を実現するための考えを記入」する欄を設け、同じ内容を問うことで、研究主題の実現に向けた意識の変容がわかるようにした。

双葉中学校 校内研		研究主題を実現するために 年度当初の考え		研究主題の実現に向けて、今回の校内研を通してわかったこと・気づいたこと・考えたこと等をお書きください。(第3回 校内研)	研究主題の実現に向けて、今回の校内研を通してわかったこと・気づいたこと・考えたこと等をお書きください。(第4回 校内研)	研究主題の実現に向けて、今回の校内研を通してわかったこと・気づいたこと・考えたこと等をお書きください。(第5回 校内研)	
全職員で振り返り考えるシート		研究主題：「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善～教師の意識改革から学校の改善へ～		5月6日 採点講習会	6月1日 教科学習会	6月20日 学習会	
所属	役職	教科	氏名				
2年				主体的・対話的はもちろん深い学びとなるような言語活動の工夫を考え、実践していきたい。	自校採点という方法でしたが、課題点や解決方法などが見いだせて有意義な時間となりました。内容だけでなく方法も今後の参考になる研究会だったと思います。	現在取り組んでいることが有効かどうか、また、より良い方法などアドバイスをいただくことができた。また、他の先生方の実践を知り、大変勉強になった。	ロイノートを活用し、フォーラムステップを感じた。
2年				話し合いの場や生徒の意見や考えを示す場を多く設定し、考えることで深い学びを実現していくことが大切であると感ずる。	表現する力、読み取る力、書く力などテストを採点する活動から、生徒の実態を知ることができた。つけない方や足りないところを補うためには、教科指導はもちろんであるが、日々の継続した活動からも伸ばすことができる。先生方の意見から感じることができた。	授業の在り方について改めて問題点や改善点など考える機会をもつことができた。同じ教科に限らず多くの先生方の授業を観察する機会があれば参考させていただきたいです。	
2年					担当教科ではなかったため、不安ではあったが、全体の話し合いを通して生徒の実態を知ることができた。先生方のご意見を伺うことで、学年で共有することなどできることもわかった。日々の中でも、このような時間が持てることより密に生徒との関わりを共有することができるとも思った。	合増活動が再開される前に、声が出せるようになるためのひと工夫の仕方のヒントをいただきました。また、ICTの活用方法や評価のヒントなど、とてもわかりやすくお話しいただきました。「感想」の書き方は、知識⇄感受を一体化して書けるような提案をしていけると、うまく引き出せるのではないかと助言いただきました。	
2年				新調の意図を変えていくことは、とても大切だと思います。自分ができることから、ひとつでも子どもたちに還元できるものを行っていきたい。	採点から、子どもたちに何が足りないのか、それを補っていくために何が必要なのかということも、自分だけの考えではなく、色々な先生方の意見を聞く中で新たな発見があった。人の意見を聞くことで共感できた。学習だけに着眼点置くのではなく、日々の生活の中からできることを見つけて「小さな事から」コツコツ、子どもたちが自分たちで取り組んでいるという実感がわいてくると、学習に対しても前向きになり、まきていく力もついてくるのかと思った。	「なぜ」を深く考えることは必要だった。子供だけでなく、教員間でも学び合い、相談しながら行うことが大切だったと思った。	ロイノートを、大切に、使ってみようと思う。しかし、おしえてくれているお金をかけていた
2年					同じ学習内容の授業でも、その生徒が何に置き、何を考えているのかを分析し、授業のポイントを変えていく必要があると改めて感じました。数学科として計算だけでなく、専門的な用語や資料を読み解く力をつけたいと思いました。	教師が意図的に生徒の考えにずれを生じさせるような発問をすることで、「なぜ」の部分を探る考えていくことができるようになった。授業進度などを考えると、学び合いの時間と教師が教える時間のバランスが難しいが、教師の話の中で、少しでも生徒に考えさせる場かけが大事だと感じた。	ロイノートの活用が、かなり提示しやすいと感じた。数学科の途中から、おしえてくれているお金をかけていた

図13 実際の振り返りシート

振り返りシートの有効性について考察するために

- ① 振り返りシートは、今年度の双葉中学校の研究主題や校内研に関わる自分自身の成果や課題の把握に効果的であったか。
- ② 振り返りシートは、今年度の双葉中学校の研究主題や校内研に関わる学校全体（全職員）の成果や課題の把握に効果的であったか。

というアンケートを行った。以下は、その結果と考察である。

実施したアンケート

- ① 振り返りシートは、今年度の双葉中学校の研究主題や校内研に関わる自分自身の成果や課題の把握に効果的であったか。



図14 アンケート①の結果

①に関わる意見より

- 校内研で学んだことをもう一度振り返り、実際に自分の授業の中で生かすことができ効果的であった。
- 新しいものを記入するときに、以前の記録が目に入り、そのときの自分が考えていたことを思い出すことができた。
- 講義や研究会で学んだことをただインプットとして終えるのではなく、自分ごととして捉えるのに役立った。
- ▲入力を後回しにしてしまうと、効果が薄まってしまうので、スプレッドシートの弱みであると思った。

9割以上の先生方から、振り返りシートが自分自身の成果や課題の把握に有効であったという回答を得られた。

各回の校内研が、その場限りの研究会に終わるのではなく、研究主題の実現に向けてのステップとして、つながりをもって意識することに有効であったことが窺える。

一方、振り返りシートへの入力、校内研終了後にタブレット端末や各自のパソコンを立ち上げて行わなければならない点について、効果や作業の煩わしさをあげて課題としてみる意見も寄せられた。

②振り返りシートは今年度の双葉中学校の研究主題や校内研に関わる学校全体（全職員）の成果や課題の把握に効果的であったか。



図15 アンケート②の結果

②に関わる意見より

○共有し、確認できるのがとても良かった。
 ○個人で学んで取り入れるのではなく、全員で取り組もうとする意識をもつきっかけになった。
 ○研究したことを自分の授業の中で、具体的にどのように活用したい等の意見もあり、すぐに実践されている先生が多く、大変効果的であった。
 ○各々の成果と課題を明確に記録として残すことは、最終的に全体の振り返りに有効であった。
 ▲他の人の記入内容を読むこともできるが、読んでいいものだろうかとためらってしまったため、効果的に生かせたと言えるほどではなかった。

学校全体（全職員）の成果や課題の把握に効果的であったかという点についても、9割以上の先生方から、有効であったと回答を得られた。

個別の振り返りではなく、同じシート内で振り返りをすることで、互いの考えを共有し、同一歩調で研究に向かうことにつながったことがわかる。また、特に若手の先生方にとっては、他のベテランの先生方の振り返りを通して学ぶことができたという点でも効果的であった。

一方、他の先生方の意見を読むことに躊躇してしまった先生も見られた。全体で共有することによって、まだ慣れていない部分があるので、共有する振り返りを継続する中で、生徒同様、先生方においても互いの意見を通して学ぶことが当たり前のようにしていく必要がある。

3 支援の結果と考察

個人の中で、どのような変容があったのかについて見ていきたい。

(1) アンケート調査の結果

個人の変容を考察するために、アンケートを行った。以下は、その結果と考察である。

・今年度の校内研究会を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の意識や自分自身の授業に変容があったか。



図16 アンケートの結果

アンケートに関わる意見より

○意識の変容はあったと思う。ICTを使うと生徒の主体性が高まるので、できるだけ授業にICTを取り入れるようにした。
 ○振り返りの工夫を考えながら、授業を行った。
 ○実験プレゼンテーションを作り、自ら実験をして結果・考察をプレゼンで発表できるようにした。
 ○小グループでの話し合い活動を意図的に入れた。
 ▲授業準備と振り返りに時間を費やしてしまったため、授業改善とまではいかなかった。

9割以上の先生方から、授業改善に対する意識の高まりや実際の授業の変容が生まれたという回答を得られた。

今年度は、データ分析WGに関わる教科の研究としては、数学と国語に絞られていたが、学習会や研究会で学んだ様々な視点は、他教科の先生方にとっても、自身の担当する教科の授業改善に生かせるものとなった。

(2) 振り返りシートの記述

年度の始めと終わりに聞いた「研究主題を実現するための自分の考え」については、以下のような変容が見られた。

振り返りシートの記述の変容

< A教諭 >

Ⓔ 今までの授業を根本から見直し、新しいことも積極的に学ぶ意識が大切だと思います。自分の授業を見直す良い機会にしていきたい。

↓

Ⓕ 主題の実現には教師の発問や課題提示、グループワークの仕方など様々な方法があるので、いろいろな視点から授業改善に努めていきたいです。

< B教諭 >

Ⓔ 生徒が思考を深められる発問にするために工夫し、思考する時間を保証する授業展開を考える。

↓

Ⓕ 教科書の内容だけでなく、生徒個々の考えを聞く発問や生徒自身の経験を尋ねる発問をすることで、多少考えを深めることにつながったように感じるが、対話的な活動の場面を多く仕組みなかったので、引き続き教材研究に取り組んでいきたい。

< C教諭 >

Ⓔ 主体的・対話的で深い学びのために ICT を有効的に活用していきたい。

↓

Ⓕ 自ら学びたいと感じるには、教科以外の時間も必要である。教師の意識改革から学校改革となっているように、どういう生徒の育成を目指すかなど意識を再認識し、共有する必要がある。来年度に向けて、課題があるので来年度も頑張りたい。

年度の始めは、授業改善に向けて、具体性に欠ける記述が多い。対して年度の終わりでは、下線部からわかるように、授業改善に向けてのより具体的な方策の記述が見られる。

C教諭の記述からは、研究主題の実現には、教科指導だけではなく、あらゆる学校教育を通して行うことや、全職員で意識を共有することが大事であるという、研究主題に対する考え方や視野の広がりが見られる。

それぞれの教員の記述から、授業改善に向け今の自分の授業に何が必要かを具体的に考え、今後につなげていこうとする意欲が高まっていることが窺える。

V 研究の成果と課題

(1) 研究の成果として

(教員一人一人の主体性の向上や授業改善に対する意識の変容について)

- ・生徒の実態をしっかりと把握して授業を計画するようになった。
- ・誤答分析をすることで授業を見直していき、日々の授業改善に生かすことができた。
- ・他教科の先生方と意見交換をすることで自分にはない視点を知ることができ、今までとは異なった視点での授業について考えることができた。
- ・授業後に自分の活動を振り返ることを心掛けるようになった。
- ・学んだことが日常生活の中で活用できるような授業づくりに取り組んだ。
- ・教科学習会をきっかけに、同じ教科の先生と教材研究など授業について意見を交わすようになった。
- ・「主体的・対話的で深い学び」の授業イメージを具体的にもちながら、授業に取り組むことができた。
- ・学習会から、具体的な授業づくりの手立てを知ることができた。
- ・研究授業を参観してから、発問を工夫して授業に取り組んだ。

(2) 研究の課題として

- ・授業改善に向けてのイメージができない先生に対しては、授業改善を具体的に進めている先生方の実践事例や実践につながる振り返りの内容を共有したり、紹介したりするなどの支援を行う必要がある。
- ・振り返りシートの有効性を高めるために、振り返りの時間を校内研の中に位置づけるなど、活用方法について検討したり、先生方の記述に対して、センター指導主事が必要に応じて

助言を行ったりする必要がある。

- ・来年度は、実践内容について焦点をあてていく中で、全国学調の教科以外での授業改善の在り方についても具体的に考えていく必要がある。

(3) 来年度に向けて

- ・来年度も研究推進校とより一層共通理解を図り、校内研究の支援を進めていく。
- ・データ分析WGと連携し、今年度の全国学調の結果分析を生かした授業研究が進められるよう、具体的な授業実践につながる支援をする。
- ・本センターのシンクタンク機能を生かし、研究推進校が研究したい内容に沿った学習会等の提案をする。
- ・振り返りシートの活用を形骸化させず、全体で振り返る中で、教員の授業改善をより具体化する。

度の研究を生かし、授業改善を意識した授業づくりの支援を行っていききたい。

【研究推進校】

甲斐市立双葉中学校

校長 小林 大

【山梨大学データ分析WGメンバー】

山梨大学	教授	田中	勝
山梨大学	特任教授	中込	司
山梨大学	教授	田中	武夫
山梨大学	教授	齋藤	知也
山梨大学	教授	清水	宏幸
山梨大学	准教授	安藤	大輔
山梨大学	准教授	山際	基

【総合教育センター研究アドバイザー】

教育研究推進幹	田沢	憲
主幹・指導主事	上村	泰子

おわりに

中学校チームでは、今年度の研究に対する取り組みを通して、推進校の先生方に目的を明確にして授業づくりを行うことの意義を伝えてきた。授業づくりに関わる具体的取り組みや振り返りシート等の活用を通して、双葉中の目指す先生方の意識改革の一助になったと考えている。また、今年